

掲 示 板

2017年度第 2号 通巻第88号 2017年 9月16日



創作バッタ

びわ博フェス、アキアカネ調査、博物館の企画展示と盛りだくさんな夏

9月になって暑さがやわらぎましたが、皆さん、いかがお過ごしですか。

今年の琵琶湖博物館の夏は、行事が盛りだくさんでした。5月にフィールドレポーター交流会を盛況のうちに終え、息をつく間もなくフィールドレポーター掲示板通巻87号と便りを作成しました。これと平行して、スタッフ一同で2017年びわ博フェスのワークショップに向けて知恵を出し合いました。その報告については2～5ページをご覧ください。ちょっとひと息ついたところでアキアカネ調査。今年は過去最高の捕獲数でした。この報告は9～11ページをご覧ください。このように、スタッフや多くの来館者と交流を深め、経験を共有できたことをうれしく思います。

さて、皆さんは企画展示「小さな生物の素敵な旅」をご覧になりましたか？目に見えるか見えないかの小さな生き物達の知られざる生活や“超能力”を余すところなく展示しています。特に毎日が慌しくて、身の回りの生き物について無関心になりがちだなあと思う方は必見です。人間とは別の生き方をする微生物はなんと不思議で、想像力をかきたてられます。11月19日まで展示しておりますので、どうぞご来館下さい。

そして、昨年開館20周年を迎えた当館は、ついに8月17日に来館者が1000万人をと突破しました！この歴史的な瞬間に立ち会えて、とても誇らしく思いました。これもフィールドスタッフやはしかけの皆さんをはじめ、多くの方々を支えられてのことと思います。本当にありがとうございます。今後は来年度の第2期のリニューアルに向けて忙しい日々が続きます。このリニューアルのテーマは「交流」。これまで当館が大切にしてきた「誰もが楽しめる空間」をさらに推し進めます。新しくできる屋外の樹冠トレイルや、新しいディスカバリールームと、これまでとは違う博物館の魅力が詰まっています。どうぞお楽しみに。

これから秋に向けてカイツブリ調査をまとめていきます。調査に協力していただいたレポーターの皆様、本当にありがとうございます。これまで知られていなかった生活の数々が見えていそうな予感がしています。外に出て、自然や生き物を観察するのは本当に楽しいですね！

フィールドレポーター（FR）担当学芸員 大槻 達郎

☒ ☒ ☞ ☞ ☞ ☞ ☞ も く じ ☞ ☞ ☞ ☞ ☞ ☒ ☒

表題	大槻達郎	P1	5	アキアカネのマーキング調査	椋島昭絃 八尋克郎	P10
1 𪛇ぶえ、𪛇ぶね、𪛇あそび	FR スタッフ	P2				
2 ヤツシイ会を訪問しました	中野敬二	P6	6	秋、里の𪛇アカネ調査案内	FR スタッフ	P12
3 殺中剤スプレーに替えて	加固啓英	P8	7	フィールドレポータースタッフ紹介	FR スタッフ	P13
4 𪛇アカネ調査 in びわ湖パレイ	椋島昭絃	P9	8	お知らせ		P14

1. 「ササぶえ、ササぶね、ササあそび」 大盛況でした

2017年「びわ博フェス」は7月8日（土）9日（日）に開催。フィールドレポーターとしてもワークショップを開催しました。

今年は笹の葉を主な材料にして色々な遊びをすることをテーマにしました。名付けて「ササぶえ、ササぶね、ササあそび」。

実習室2を会場として9日（日）13時～15時の1回開催ながら、スタッフ一同の苦心の数々を十分に発揮できた楽しいワークショップであったと思います。テーマ毎に担当者を割り当て奮闘しました。

さー始まりです。受付で参加の用紙をもらって各コーナーに入ります。

“ササぶね”をつくると、ふねのスタンプが押してもらえます。“ササうお”が完成するとエンゼルフィッシュのスタンプ。ちゃんと“ササぶえ”が鳴ったら、笛を吹いているパンダのスタンプが参加書に押しもらえます。全部そろったらササあそびマスター認定書となります。ご褒美として、とてもすてきなシュロの葉バッタのおみやげが進呈されました。



（文と写真 フィールドレポータースタッフ：FRS 中野敬二）

“ササぶね”を担当しました



ミヤコザサと思われる笹の葉を準備しました。最初100枚くらいで十分と高を括っていましたが、ところが、お子さん達が沢山遊んでくれて予定の時間が半分位で無くなりそうなので、あわてて笹を数回追加して、約200枚になりました。帆かけ舟の人気があったようです。

参加された方の会話を紹介します。

1、ある親子連れの会話；「お父さん作れる？」 「作ったことあるけど、でも帆かけ舟やで、どうやって作るかな。」 「私が作ってみる、教えてください。」（担当、「笹には裏表があります。手で触ってみてください」） 「ホンマ、ツルツル面とザラザラ面があるね。」（担当、「ザラザラ面は水をはじくので、船の外面にします。ツルツル面を上にして、茎が帆になるので折り目を付けて下さい。後は笹舟つくります。」） 「なんとかできました。どうもありがとうございました。」



2、お母さんとお子さんの会話；「お母さんこの笹舟カッコいいよ、作りたい」 「私作ったことないよ。教えてもらって作りなさい。」 「帆かけ舟、上手にできたね。」 「カッコいいやろ！」 「さあ、隣の水路で浮かばして競争しよう。」

（文と写真 FRS 椋島昭紘）

“ササぶねレース”を担当しました



長さ2mの孟宗竹でかまぼこ形水路を作り、それにササぶねを浮かべ、ゴールまでのタイムを競う「ササぶねレース」を行いました。ところが、三つの障害が発生したため、思うようなレースができませんでした。

まず、船を浮かべた途端に沈没するものが続出しました。船の制作過程で笹の撥水性が失われてしまったようです。

次に水路に水の流れを起こすことが困難だったので、船を進める為にうちわで煽ぐ必要がありました。この方法は技量差が発生するため、レースとしての面白味はあったのですが、沈没を助長する要因にもなりました。最後に竹製水路の内面の節による凹凸を完全には除去できなかったため、船が凹凸に引っ掛かり停止するものも出ました。結果として、ゴールに到達できたのは2割くらいでした。それだけにゴールに到達した喜びはひとしおだったようです。また何度も作って挑戦する子もいました。次回は今回の課題を克服し完成度を上げたいと思います。



(文 FRS 井上修一、写真 FRS 津田國史)

手先も頭もフル活用の“ササうお”作り



ササの葉を2枚使って、小さい魚のクラフトを作りました。題して“ササうお”。2枚の葉を編み込むようにして作るため、本当は、シュロやガマのように長くてコシのある葉が素材に適しています。今回は“ササあそび”ということで試行錯誤の結果、ミヤコザサ等（葉長20cmくらい）を用い、葉脈に沿って縦半分に折って、リボン状にして使いました。

ワークショップは、子ども連れのご家族を中心にたくさんの方で大賑わいでした。“ササうお”作りはどちらかというと大人向けだったのですが、折り紙に慣れた人でも、2枚の葉を操作するために3次元の空間認識が意外に難しく、皆さん四苦八苦しておられました。最後の工程で4つの端を少しずつ引っ張って形を整えると、丸みを帯びた魚の形がはっきり現れ、皆さんの顔がそこで初めて輝きました。1度完成すれば2度目は楽に作れますので、家族連れの場合には、初めに大人の方にやり方を習得してもらい、その後、お子さん・お孫さんに伝授してもらったりもしました。



用意していた材料（100人分200枚）を開催時間帯の途中で使い切り、新たに100枚を調達したのですがそれも無くなったため、少し早目に店じまいしました。反省点は多々ありますが、葉の長さが十分にあれば皆さんに楽に作ってもらえたらと思う、悔まれます。

(文と写真 FRS 前田雅子)

“ササぶえ” 作りを担当しました



今回のササぶえづくりですが、意外なことに初めて作る人ばかりで、都会の人はこのような遊びをしていないのかと思いました。いざササぶえづくりをしてみると、音がでるまでふえ吹きを頑張る子がいて、とても印象的でした。また、10才くらいまでの子は、音がでると喜んでいました。ササぶえ以外にも、音をだすのに使える材料（カラスノエンドウなど）を説明する等と工夫を凝らしました。

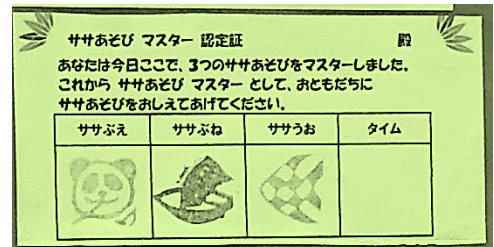
ササぶえを完成させて、ふえを吹けたら子どもにスタンプを押してもらおうようにしましたところ、子ども達は押すこと自体も楽しんでいました。実はふえの材料は3時までは足りていましたが、3時過ぎからはふえの材料が不足するほどでした。そのため材料が足りなくて、待ってもらった家族も出てしまいました。また、今回のササぶえづくりのためにできるだけ音が鳴るような材料を用意しましたが、ササが若すぎて大変だったことをご紹介します。

(文と写真 FRS 山崎千晶)

“受付” はてんやわんや！

ワークショップが始まる前は「参加してくれる人数が少なかったらどうしよう。」等と思っていました。いざ始めると、受付はもうてんやわんや！多くの家族が参加してくれました。

今回のワークショップでは、子ども達が全ての遊びに夢中になってもらえるように、「ササあそびマスター認定証」を作りました(写真)。子ども達がササぶえやササぶね、ササうおを完成させると、各ササ遊び担当のスタッフがササあそびマスターの認定スタンプを押すというものです。ちなみに全てのスタンプが集まると、上の写真のようになります。FRスタッフの山崎さんお手製のスタンプは子ども達にも大好評でした！子どもだけで



なく、認定証をほしいという親御さんもおられました。帰りに全てのスタンプのついた認定証を見せてもらったら、“ヤッサシイ会”の方に作っていただいたシュロの葉バッタを持ち帰ってもらいました。このバッタを見て、親子は大満足！受付をしなくてワークショップに参加した人も含めると、200人ほどの方が参加してくれました。

(文 学芸技師 大槻達郎、写真 FRS 津田國史)

パネル 笹（ササ）のお話つくりました

ワークショップのテーマが「笹（ササ）」と聞いた時、大変興味がわいたのはそのせいかもしれません。自然素材の素朴な遊びを若い世代にも伝えたいと、準備の段階からメンバーの熱意の盛り上がり、私は圧倒されっぱなしでした。

今回の「見て、触れて、作って、遊ぶ」企画は、参加者も主催者も楽しく満足でき、メンバーの思いは伝わったようです。ただ、私たち自身も準備中の雑談の中で、笹についての知識が意外に少ないことに気が付きました。「笹はどんな植物なの？」「笹と竹の違いは？」身近な素材で便利な笹・竹について、少し知りたくなったのです。そこで、その疑問を共有できる参加者側の視点で、「ササ」についての展示パネルを作成してみました。

子供たちが喜んでくれたお土産の「草のバッタ」と同時に、これを読んだ人には笹についての知識を少し持ち帰っていただけたようでした。嬉しいことです。

(文 FRS 松村順子、写真 FRS 津田國史)



ワークショップを終えて

開催直後はゆっくりした参加数でしたが、すぐに用意した6つのテーブルが満席になり、この状態が終了まで続き、時間30分オーバーになってしまう大盛会になりました。

200名近い参加者になるとさまざまで、子供達の初めての体験は分かりますが、付き添いのご両親まで初めてという方が多かったようです。4つのコーナーそれぞれ初めは戸惑いがありましたが、要領をつかむのは何処もかなり早く、おもしろい、たのしい、とみんなに喜んでもらいました。もちろん全員認定者になり家に帰ってからまた作ろうという子供のこえも多く、ササあそびの継承に少しでも役立ったかなーという気分させられました。

FR スタッフの疲労感は後からドッと出てきましたが、大成功が何よりの薬。終了後の反省会では色々な思いや反省も出てきました。担当者に今回の催しで思ったことを述べてもらい記事にしてもらったところ、以上のような報告になりました。なるべく参加していただいた子供さんやご家族の声を紹介してもらうことで今年の「びわ博フェス」の雰囲気と盛況の様子がレポーター各位に伝われば幸いです。



お土産のバッタ “ヤサシイ会” さま 提供
おととメです。どっちがどっち？

右がオスです

(文と写真 FRS 中野敬二)

2. ヤッサシイ会の訪問

FRS 中野敬二

“ヤッサシイ会”さんの正しい名称は「南滋賀村の歴史を考える会」といいます。

今夏、びわ博フェスの直前にレポータースタッフの松村さんが、大津市役所でヤッサシイ会の竹細工の展示会場おられた会員さんと出会いし、ササあそびワークショップの話をするうちに、世話役さんが興味を持たれ、後日、会の皆様がシュロの葉っぱのバッタを大量に造って参加者のお土産にと提供して下さいました。今回の掲示板巻頭写真とびわ博フェスの報告文書中では、その精巧なシュロのバッタの姿を紹介させていただきました。9月7日（木）に報告を兼ね参上したい旨申し上げたところ、快諾いただきましたのでFRスタッフを代表して工房に伺いました。



工房(左)と
公会所(奥)

待って頂いたのは会長の大伴偉造さん、世話役の井田久雄さん(総務・会計兼務)を含めて5名の方でした。フェスのお礼を述べた後、小々戸惑いましたが、にわかインタビューになって型どおりの質問をさせてもらいました。



(中野敬二 以下 FRS) “ヤッサシイ会”名称のいわれが知りたいのですが？

(大伴偉造さん 以下 会長さん) この会所、工房のある“新在家村”“正興寺村”地域の方言で「すごい！」という意味。小さな「ッ」がミソ。良い意味、悪い意味、両方に使います。誰かがすごい事をしたとき……
「ヤッサええや！」「ヤッサシイな！」といった感じ。

(FRS) 創作や、活動はどんな感じですか？

(井田久雄さん 以下 世話役さん) 元々は竹炭づくりの保存継承活動から始まって、いまは地域の歴史を守り残す活動が主体で、竹を使った工芸品制作もその一環です。活動範囲は地元滋賀四村と呼ばれる、赤塚、見世、新在家、正興寺です。主にこの地域の祭り、学校行事、四季の催しに参加します。

(FRS) 会員の皆さんは？

(会長さん) 現在17名で女性が6名。ご夫婦の参加が多いです。

(FRS) それにしても活動の中身と範囲が広いですね。

(世話役さん) 子供から老人まで、地元ふれあいをしながら古い歴史を守り伝えるのが活動の中心です。幼稚園にも行きます。志賀小学校では3年3学期の社会科校外学習として1月と2月クラス別に6回、公会所内での昔を知る学習と、工房での創作自習が決まっています。

先の9/2(土)には大津市生涯学習課主催の大津人実践講座で、「竹林の恵に感謝、竹細工に竹炭」を開催しました。

この後様々な活動の内容を聞かせてもらいましたが、紙面に収まりきれません。とにかく地域行事のほとんどの参画され、歴史を語り伝えて精力的に行動されているのが十分に伝わってきました。訪問の前には、皆さん工房の某所に位置を構え、黙々と竹細工の制作に打ち込んで居られる姿を想像していましたが、一人一人が、歴史の語り部で、先生、講師、時には役者になって芝居を演じて歴史実習もするというスーパースターの集団とお見受けしました。

活動の全体は十分に理解できましたが、レポーターとしては竹細工の緻密さ精巧さの本質をもう少し知りたい気持ちが最後まで残りました。

これだけ多方面に活躍しながらいつ制作するの？
この疑問には「まあ、やるときには出来る。」と淡々とした答えでした。実際の作品は公会所のステージに設置されていました。名付けて「阿波踊り」。



男おどり、女おどり、鳴りもので“連”を造った40人の列が180cm×45cmのパネル場で生き生きと踊っています。

10月末の滋賀学区文化祭でお披露目された後、大津市展示会場に展示される計画です。因みにフェスで頂いたシュロのバツは10分程度で1匹制作されたそうです。

ここまで来ると「ヤッサ、ヤッサのパワーじゃん！」なんて云いたい気持ちになりました。

そんなヤッサシイ会の皆さんが私たちフィールドレポーターとの交流を考えておられます。交流の接点を考える前に、一度お互いの都合の良い日を選んで資料館の見学をさせていただけるような進め方でいかがでしょうかと申し上げ、おいとましました。

今回の活動に対して仲立ちをしていただき、びわ博フェスを盛り上げていただいた大伴偉造様、今回訪問の中継ぎを頂いた井田久雄様、そして会の皆様に心より感謝いたします。

(写真：会の了解を得て中野が撮影)

3. 殺虫剤スプレーに換えて台所用洗剤水溶液を。

投稿日[20170719] 彦根市 加固啓英

台所のガスレンジや流し台の下の床には水道管やガス管（またはホース）が立ち上がり、排水ホースが下水管に到る為の丸い穴があり、そこを通過して床下に棲むゴキブリ等は自由に屋内に入り込めます。

夜な夜な現れ、台所周り、テーブル、食器、食材、上を裸足で歩き回る害虫に殺虫剤スプレーで立ち向かってタッチダウンならず元の穴に逃げ込まれるのが落ちです。



殺虫剤スプレーを屋内で噴射すると云うことは毒物である殺虫成分と、引火、爆発事故の多発するカセットガスコンロと同じメタン、エタン、プロパン、ブタン、を生活環境に撒き散らすことです。

そこで100円均一ショップ扱いのトリガー付きのスプレービンに台所用洗剤を加えた水道水を用意し夜な夜な現れるゴキブリ、流しの三角コーナーのゴミ受けから発生するコバエ、庭の通路にはみ出た草木の裏に待ちかまえ鎧袖一触！猛烈に痛痒いイラガの幼虫のイラムシにも、開花を心待ちにしているバラや草花の花茎にアリの強力なサポートで群がり付き枯らせてしまうアブラムシ（アリマキ）にも市販の殺虫剤スプレー以上に効果があります。これは大型船舶の舷側に並んだ丸窓のように、昆虫の体側にほぼ等間隔に並ぶ丸い孔の気門を濡らし、中を水没させ、窒息死させるのであり、環境に負担を残しません。

さって、御用とお急ぎでない、探究心、向上心と弥次馬根性に富む皆様以下をお願いします。

この限りなく只に近い洗剤入りの水道水がアルゼンチンアリ、ヒアリ、の駆除に有効か、また昆虫以外のセアカゴキグモ等にはどうかの確認の報告と、有効であれば広く世間への周知です。



有効であればヒアリやアルゼンチンアリの巣を遠巻きにした溝を掘り濡れ性の良いこの水溶液を多量に流し込みます。少し間を置いてその内側にも同様のことを繰り返し行います。すると巣の出入り口からは卵や蛹を運び出す多数のアリが出てくる筈で、これをこの水溶液かトーチの焰で全滅させる事は容易に思われます。

（イラスト出典：いらすとや）

4. 『アカトンボ（アキアカネ）の調査 in びわ湖バレイ』の結果



文・写真 FRS 栴島昭紘

フィールドレポーター主催のアキアカネのマーキング調査を8月10日（木）にびわ湖バレイで開催しました。2008年度から始めて今年は9回目になります。当初の予定は8月5日（土）でしたが、台風5号の接近で打見山(1108m)の山頂は霧雨で視界が悪いという情報により中止にしました。そして定例会に変更して、交流室に集まった皆さんで相談の結果、台風の通過した後の天気の良い日に有志だけで参加して調査をすることになり、8月10日に開催することにしました。

午前10時頃、びわ湖バレイのロープウェイ乗り場には参加者8名が集まっていたきました。麓は曇り空で心配しましたが、ロープウェイで打見山山頂に着くと、天気は薄曇りでしたが風は弱く、何によりも目前にアキアカネが飛び交っていて、マーキングには良い条件でした。

打見リフト乗り場横の広場に集合し、八尋学芸員から準備して頂いた資料で「アキアカネの成虫形態・生息環境・生態・分布について」、「アキアカネが減っている」「赤トンボの見分け方」「トンボのオス、メスの見分け方」の説明を受けました。

そして、マーキング調査の方法を説明した後、11時00分頃から開始しました。午前の調査は打見山山頂から打見リフト終点の笹の平遊びの広場まで、リフト脇登山道の草原とアサギマダラ広場を、約1時間調査しました。頭の上、ロープ上、草木の上にトンボがたくさん見つかるので、あまり移動しなくて捕獲でき、順調にマーキング調査ができました。全員が休む暇もないぐらい熱心にマーキングしていました。リフト終点近くの芝生の広場で昼食、約45分の間、参加者が三々五々食事しながら交流しました。



アルペンコース約300m間



午後は蓬萊山リフトの笹の平の広場から谷に下るアルペンコースグレンデの約300m位迄の範囲を予定通り13時から約1時間調査しました。この場所は昨年もそうでしたが、3年位前から過去に比べて飛んでいる数が少なくなっています。皆さんは山の斜面や森の中など、トンボのいる場所を探しながらの調査で効率が良くない様子でした。

打見山グレンデを登りながら山頂に帰る途中にも、アキアカネが沢山見られマーキング調査をしながら集合場所のリフトの山頂駅広場に向いました。

集合後、記録票を回収してそれぞれの感想を述べ、楽しかった一日を振り返りました。調査結果は、調査約2時間、参加者8名全員のマーキング総数は923頭、午前は550頭、午後は

373頭、オス475頭、メス448頭でした（参加者平均は115 [頭/人]）。今回で9回目ですが過去最高でした。その理由はよく分かりませんが、台風が過ぎた2日後で沢山飛んでいたのかも知れません。

5. アカトンボ（アキアカネ）のマーキング調査、過去9年間の結果

文・写真 FRS 椋島昭紘

フィールドレポーターでは“アキアカネのふるさと探し”として、2008年度（第1回）からアキアカネのマーキング調査を比良山系のびわ湖バレイでスタートしました。そして今年（2017年）まで、途中2012年に雨天中止しましたが、毎年実施し9回を重ねてきました。

アカトンボの一種、アキアカネは6月下旬に里の田んぼなどでヤゴから成虫になり、梅雨も明けて暑さが厳しくなる7月から8月にかけて、気温の低い近くの山の山頂付近ですごし、秋になると再び里に下りてきて産卵して一生を終えます。びわ湖バレイの打見山（1108m）、蓬莱山（1174m）の真夏の気温は20℃～25℃と涼しく、アキアカネが多く集まっているところです。アキアカネを捕獲して左後翅に黒い印をしてリリースします。そして、秋10月頃に里でアキアカネ調査をして、アキアカネ頭数や左後翅の黒い印の個体が見つかるかどうかを調べています。

過去9回のマーキング調査結果を報告します。2008年～2017年の調査日とその天気、調査地点は表1とおりです。表2は表1の調査地点記号とその位置の説明です。マーキング頭数の各年度の結果は表3の通りです。2012年度は雨天中止、2014年以降は調査地点を決めてマーキング頭数の定点観測として記録することにしました。



左後翅にマーキング（黒い

今年（第9回）はマーキング頭数、平均頭数の両データともに過去最高になりました。この日は天気に恵まれて、アキアカネが打見山山頂や調査地点に沢山飛んでいました。

秋には比良山系の麓で毎年アキアカネの調査をしてきましたが、残念ながら左後翅に黒い印をした個体を今まで見つけることはできていません。

表1. 調査年月日、天気、調査地点

回	年月日	天気	調査地点
1	2008年8月9日	晴天、微風	G
2	2009年8月23日	晴天、肌寒い	A(約1000m間)
3	2010年8月7日	晴天、微風	A(約1000m間)
4	2011年8月6日	晴天、微風	A(約1000m間)
中止	2012年	雨	
5	2013年8月3日	晴天、微風	A(約1000m間)
6	2014年8月3日	濃い霧	U&A(約300m間)
7	2015年8月1日	晴天、微風	U&A(約300m間)
8	2016年8月7日	晴天、風が有る	U&A(約300m間)
9	2017年8月10日	薄曇り、微風	U&A(約300m間)

表2. 調査地点記号の説明

記号	調査地点（びわ湖バレイ）
G	ジャイアントコース～汁谷
A	笹平～アルペンコース～汁谷
U	打見リフトの琵琶湖側登山道とアサギマダラの広場

表3. 2008年度（第1回）から2017年度（第9回）の結果

回	実施年月日	参加者数、(網数)	調査 時間	マーキング頭数				平均頭数 [頭数/網数/時間]
				オス	メス	不明	合計	
1	2008年8月9日(土)	16名、(16)	3	144	199	0	343	7
2	2009年8月23日(土)	8名、(8)	3	42	89	0	131	5
3	2010年8月7日(土)	14名、(14)	3	205	580	0	785	19
4	2011年8月6日(土)	14名、(14)	3	187	408	0	595	14
5	2013年8月3日(土)	9名、(8)	3	362	417	6	785	29
6	2014年8月3日(日)	19名* (19)	2	89	90	0	179	5
7	2015年8月1日(土)	11名* (11)	2	290	596	0	886	40
8	2016年8月7日(日)	12名 (10)	2	145	169	0	314	16
9	2017年8月10日(木)	8名、(8)	2	475	448	0	923	58

*注) 琵琶湖博物館のイベントとしてフィールドレポーターと共催しました。

これまでのアキアカネのマーキング調査を振り返って

総括学芸員 八尋 克郎

フィールドレポーターでは、2008年から毎年（2012年は雨で中止）、琵琶湖バレイでアキアカネの移動距離や移動場所を調べるためマーキング調査を行っています。

今年で9回目になります。今年は、923頭と過去最高のマーキング個体を数えました。当日は、曇りでアキアカネの飛翔はあまり見られないのではないかと半ばあきらめていたのですが、良い意味で予想を裏切る結果となりました。はっきりと分かりませんが、台風の後だったことが多かった要因としてあるのかもしれませんが、一方、過去最低だったのが、霧の中で実施した2014年でした。

このアキアカネのマーキング調査は、フィールドレポーターの夏のイベントとして定着しているようです。フィールドレポーターの皆さんは、調査を重ねるたびにトンボのオス、メスの区別もうまくなり、子供のように熱心にアキアカネを追いかけて楽しんでマーキング調査をされています。また、他の方からどういう調査をしているのか聞かれることもあり、丁寧に説明されています。残念ながら、マーキング個体が少ないため、秋の里に下りて来るマーキング個体は未だ見つかっていません。成果の出ない調査ですが、フィールドレポーターの皆さんの姿を見ていると、調査そのものが楽しく、身近な自然を感じとれる調査であることが、これまで調査を継続することができた原動力になっているのではないかと考えています。

知り合いの昆虫生態学の研究者に聞いたところ、マーキング個体数のほか時間や調査人数などをしっかり記録しているので、もしかしたら個体数推定の解析に使えるかもしれないとのこと。今後、蓄積されたデータの活用も考えていけたらと思っています。

6. 秋、里でのアカトンボ《アキアカネ》の調査案内

FRS

今年の夏も8月10日比良山系の打見山（びわ湖バレイ）でアキアカネのマーキング調査をしました。当日は天気にも恵まれて、マーキング数は過去9回の最高で923頭でした。

毎年、マーキングされたアキアカネ（下に説明図）を里で確認することができていません。しかし、今年は見つかることを期待して里の調査を下記の通り開催することにします。多くの皆様の参加をお願いします。

記

調査場所； 大津市伊香立南庄町周辺、起点は融神社駐車場（伊香立南庄町1846）

日時； 平成29年10月7日(土)；13:30~15:30

雨天中止します。中止の場合は9:00頃に参加申込者に連絡いたします。

集合場所； 琵琶湖博物館通用口横駐車場。

集合時間； 12時45分

参加費用； 保険料 1人100円（はしかけ登録者は必要ありません。）

持ち物； 水筒、雨具、帽子、長袖、長ズボン等ハイキング用具、双眼鏡(準備できる方)なお、捕虫網はお貸しできますが、準備できる方は持参してください。

申込み； 参加ご希望の方は9月27日までに琵琶湖博物館フィールドレポーター担当大槻学芸員に申込をお願いします。

お名前、電話番号（当日の緊急連絡番号）、参加希望人数、捕虫網借用数
調査場所に直行される方はその旨連絡（記載）して下さい。

Eメール； freporter@lbn.go.jp

電話； 077-568-4811(代表) FAX； 077-568-4850

郵便； 525-0001 草津市下物町1091



左後翅に黒マーク

7. フィールドレポーター・スタッフ紹介

今年度から新しく2名の方がスタッフに名乗りを上げてくれました。井上修一さんと松村順子さんです。お二人に自己紹介をしていただきました。

フィールドレポータースタッフになろうと思ったきっかけは？これからスタッフとしてどんなことに挑戦していきたいですか？新しいスタッフの思いをおききしました。どうぞ、よろしくお願い致します！

自己紹介 井上修一

2016年にはしかけに登録して以来「びわたん」に参加していましたが、2017年6月からはフィールドレポーターにも参加するようになりました。

「わくわく探検隊」を1年やっているなかで参加者から質問を受けて強く感じたのは自分自身に動植物や自然分野の知識が不足しているということでした。そして博物館側にいる以上は曖昧な回答はできないと感じていました。フィールドレポーターとしての活動を行う中で広い分野に関心を持ち、仲間や学芸員の方から学ぶ機会を増やし自分のレベルを上げて子供たちと接していきたいと願っています。



自己紹介 松村順子

本年6月より、大久保学芸員の産休代替として、交流係で勤務しています。

フィールドレポーター会にかかわるきっかけは、ある日、「橋の下にカイツブリが2羽いた」との話が耳に入り、翌朝、早速出勤前にカイツブリを観に、休日の朝もう一度探しに。ついに、カイツブリ調査をしているグループがあるとフィールドレポーター会を紹介されたのです。「とにかく気楽で楽しい。おしゃべりから調査まで、チームワークもばっちりですよ」とのこと。

初めて参加した会議で驚いたのは、面白いアイデアも次々に飛び出し、調査や検討や結果の集積も素晴らしいこと。市民ならではのユニークな課題に、自由な討論の雰囲気にも感激でした。これから何が飛び出すのかと、わくわくしているところです。スタッフとして、この活動を通じて、びわ博で市民が体験できる調査研究の楽しさを皆さんにお伝えできればと思っています。



(イラスト出典：いらすとや)

7月～9月の活動報告

月	日	内 容	参加者	主な議題・活動
7月	1日(土)	定例会	9名	①みのむしレポーターだより、7/22発行確認 ②びわ博フェス準備、役割分担、リハーサル
	8日(日)	びわ博フェス	9名	ワークショップ開催「13:00～15:30」 参加者 約200名 パート分担。終了後 懇親反省会
	15日(土)	定例会	8名	①アキアカネ調査準備、連絡網確認 ②掲示板内容はびわ博フェス中心で確認
8月	5日(土)	アキアカネ調査	8名	気象不良の為中止。レポータースタッフ会議に切り替え、2017年2回目テーマフリーの討議
	10日(木)	アキアカネ夏の調査日	8名	びわ湖バレイ 11:00～14:00、薄曇、微風 9回目にして最高のマーク数(923頭)
	19日(土)	定例会	5名	①アキアカネ調査報告 ②掲示板発行日程確認 ③2017年2回目テーマの検討
9月	2日(土)	定例会	9名	①アキアカネ夏の調査の解析、秋の調査予定 10/7 ②掲示板原稿締め切 ③2回目テーマ検討
	16日(土)	定例会	5名	①掲示板(88号)発行 ②2017年2回目テーマ「はし」の事前調査の件

10月～12月の活動予定

	日 時	内 容	場 所
10月	7日(土) 13:30～15:30	アキアカネ 秋、里の調査	伊香立南庄町
	21日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室
11月	4日(土) 10:00～17:00	定例会	交流室
	18日(土) 13:30～17:00	定例会、JICA 研修	交流室
12月	2日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室
	16日(土) 13:30～17:00	定例会	交流室

定例会は原則として第1、第3土曜日の13:30～17:00に琵琶湖博物館の交流室で行なっています。どなたでも参加できますので、どうぞお気軽にお越しください。見学も大歓迎です。なお、予定が変更になる場合があります。詳細は、下記の電話・メールで、琵琶湖博物館フィールドレポーター係までお問い合わせください。

編集後記

巻頭の挨拶のように非常に盛りだくさんな活動実績の3ヶ月でした。新しい仲間との出会い、交流の場が広がって少し充実感を覚えました。実りの秋に期待がつながります。

(担当 中野)



滋賀県立
琵琶湖博物館
交流センター
〒525-0001 草津市下物 1091
TEL 077-568-4811 (代) FAX 077-568-4850
E-mail: reporter@lbm.go.jp